

## 母性看護学における情意領域に着目した学内演習の検討

新田 祥子<sup>1)</sup>・藤中 節子<sup>2)</sup>・李 節子<sup>2)</sup>

An Examination of Maternity Nursing Practices within the Campus,  
Focusing on Affective Domain of Teaching and Learning Objectives

Sachiko NITTA<sup>1)</sup>, Setsuko FUJINAKA<sup>2)</sup>, Setsuko LEE<sup>2)</sup>

### 要 旨

本報告の目的は母性看護学Ⅱ（母性看護の実践と技術）の演習における教授活動の内容を情意領域に重点をおき検討することである。看護演習における教授活動の内容を、学内演習担当者間で振り返り、話し合いを重ねB.S.Bloomの教育目標の中の情意領域を参考に検討を行った。

演習では腹囲・子宮底測定、妊婦体験、レオポルド触診、妊婦体操、新生児のバイタルサイン測定・沐浴、授乳における看護技術の習得を中心に行った。特に妊産褥婦の心情を共感できるよう、情意領域を中心に検討した。演習内容では、腹囲・子宮底測定、レオポルド触診では、模型を用いながら視覚的なアプローチと実際に触れてみるという点から学生が肌で触れて感じ取り、看護について考えられるようにした。

学生はこれらの経験から、看護職として必要となる配慮や援助のあり方について考えることができた。講義で、沐浴手順や配慮する点を説明した内容を知識として理解するだけでなく、その環境におかれる対象者の立場を自ら体験し考えることを経験することは、今後の看護援助を行う際の、専門職として必要とされる能力を伸ばすことにつながると考える。

キーワード: B.S.Bloom、母性看護学、情意領域、看護教育

### Abstract

The purpose of this study was to examine contents and teaching methods of the practices of maternal nursing within the campus, focusing on affective domain of teaching and learning objective.

A responsible person of the class and teaching staffs looked back the each nursing practice class and discussed its contents and teaching methods, referring to the taxonomy of education objectives by B.S.Bloom and others. Affective domain was mainly focused and examined.

During the practices of maternal nursing, students experienced wearing maternity simulation jacket, learned how to measure fundus height and abdomen and following observation items by using pregnant woman model, touching mother's abdomen by Leopold's Maneuvers, newborn bathing, and measuring infant vital signs. By visual approach and touching on the abdomen in real, students could learn and understand by their own experiences, so they were more considerate for pregnant woman's physical and emotional support and trying to minimize the time when measuring and touching the models. Extending their minds on maternal nursing from one's own experience was much emphasized in the classes.

Those experiences and knowledge from the lectures would led them to think more about how better caring/ nursing ought to be, and would support them developing further technical knowledge and skills required to nurses.

Keywords: B.S.Bloom, maternity nursing, affective domain, nursing education

所 属:

<sup>1)</sup> 長崎県立大学シーボルト校 看護栄養学部 看護学科

<sup>2)</sup> 長崎県立大学シーボルト校 大学院人間健康科学研究科

<sup>1)</sup> Department of Nursing, University of Nagasaki, Siebold, faculty of nursing and nutrition

<sup>2)</sup> University of Nagasaki, Siebold, Graduate school of Human Health Science

## I. はじめに

本学では、母性看護学の授業や臨地実習をより効果的な学習にするため、母性看護学Ⅱ（母性看護の実践と技術、以下母性看護学Ⅱ）の授業において演習を行っている。

母性看護学Ⅱでは、知識や技術の習得だけでなく、看護の対象者の立場になって考えることが出来るような体験にも重点おき演習計画を立案し、実施している。母性看護学の授業全般における研究や母性看護学実習における情意領域の学習内容の効果の検証や内容の検討の報告はあるが、母性看護学の演習内容における情意領域に重点を置いた報告は少ない。ここでは、母性看護学Ⅱの中で実施した学内演習内容を振り返り、今後の演習内容の改善につなげることを目的として演習内容を検討したことを報告する。

## II. 方法

母性看護学Ⅱで行った演習における教授活動の内容を、学内演習担当者間で振り返り、話し合いを重ね、B.S.Bloomの教育目標の分類学の中の情意領域を参考に検討を行った。

## III. 母性看護学Ⅱ（母性看護の実践と技術）の概要

母性看護学Ⅱは講義形式の授業と演習から構成されており、学習内容は、妊娠期・分娩期・産褥期の女性の看護および新生児の看護を中心としている。対象者の各時期の身体的・精神的特徴や必要となる看護技術についてそれぞれ講義形式で授業を行い、その後に演習を行う。演習については、母性看護学実習で必要となる看護技術を中心に演習内容を構成している。また、演習時だけでなく、講義の中でも、DVD等の映像を活用しながら、視覚的なアプローチを通して母性看護学で対象となる女性および新生児の特徴や看護技術について視聴し、対象者の特徴をイメージした上で演習に臨むことができるような内容を構成した。その中でも、周産期の女性の立場に立ってケアを考えることができるよう、学生自らが体験し考えることができる演習内容とした。妊娠期から産褥・新生児期における演習の目標は以下に示す。

- ①妊娠期に必要な看護技術・支援について理解し実施することができる。
- ②産褥期に必要な看護技術・支援について理解し実施することができる。
- ③新生児に必要な看護技術・支援について理解し実施することができる。

## IV. 演習の実際

すべての演習時間において、演習中は一方的な指導とならないよう、看護技術を経験した学生が、感じたことを学生間で話ができるようにした。情意領域では、教員から考え方を伝えるのではなく、学生が自分の経験や体験を通して内面化を充実できるような構成とした。妊娠期から産褥・新生児期における演習の実際を以下に示す。

### 1. 妊娠期の演習

妊娠期の演習では、腹囲・子宮底測定、妊婦体験、レオポルド触診、妊婦体操における看護技術の習得を中心に行った。腹囲・子宮底測定、レオポルド触診では、模型を用いながら視覚的なアプローチと実際に触れてみるという点から学生が肌で触れて感じ取り、看護について考えられるようにした。学生は、技術的な部分だけでなく、肌に触れる際の介助者の手の温度を確認し、露出を最小限に抑えるという配慮や注意点を実際の人形や模型で体験した。

資料1. 妊婦体験ジャケット



妊婦体験では、妊婦体験ジャケットを着用した（資料1）。妊婦体験ジャケットは約7kgと妊娠後期の時期の妊婦のシミュレーションができる。

妊婦体験ジャケットを着用し、事前に講義で学習した妊娠期の女性の特徴を踏まえたうえで、妊婦の擬似体験を通して妊娠期の女性の生活を考えることができることを目的とした。妊婦体験ジャケットを着用した学生は、靴を履いたり脱いだり、床にあるものを取ったり、立ち上がる動作などを体験した。それに対して、学生は、自由に妊婦役の学生に援助を行った。ジャケット着用による体重増加により、学生は体の重さの変化を実感し、動作時の身体への負担を感じていた。また腹部増大による足元の視野の制限による危険性についての気づきに関する発言が学生間の会話で聞かれた。

また、近年、マタニティーヨガを取り入れている病院もあるため、妊婦体操に関する演習では、マタニティーヨガを体験しながら、妊婦への効果について考える機会を作った。妊婦体験を行った後のため、腹部の増大した妊婦が体を動かすことのイメージを膨らませながら行っていた。

腹囲・子宮底測定、レオポルド触診法の演習では、学生は、妊婦体験を行った上で、腹囲・子宮底測定の演習を行うため、計測の際に妊婦が仰臥位で過ごす大変さのイメージができており、できるだけ仰臥位で過ごす時間を短時間にしようと対象者の身体的負担をイメージしながら測定を行っていた。また、レオポルド触診法では、学生は事前に自分の手が冷たくないか確認し、計測の対象者が不快な思いをしないような援助の仕方を意識しながら計測を行った（資料2）。

資料2． 模型によるレオポルド触診法の様子



## 2. 分娩期の演習

分娩期の演習内容としては、産婦の身体的・精神的側面からの負担やそれに対する看護について各自考えることができるような演習内容とした。分娩期の対象者の身体的・精神的負担について実感することをテーマとしていた。そのため、学生は、分娩の進行状況については、DVDの教材を使用しながら、分娩第1期から3期までの経過についてストーリー性のあるDVDを選択し視聴した。また、演習室には、分娩台があるため、学生は、実際に分娩台に乗り、婦人科碎石位をとることでの下肢の負担だけでなく、羞恥心に関する配慮の必要性についての気づきもあった。

## 3. 産褥・新生児期の演習

産褥期の演習では、新生児の看護、授乳介助、褥婦の子宮底測定、沐浴実施を中心に行った。

沐浴実施では、病院に設置してある沐浴槽とベビーバスによる沐浴と2種類を準備し、沐浴を行った。通常、病院で沐浴指導を行う場合、沐浴槽が高い位置にあるため、立った状態で沐浴を行う。しかし、退院後、褥婦やその家族が一般的に行う沐浴では、ベビーバスを使用することが多い。ベビーバス使用の場合、浴室や床など低い場所で、褥婦や家族は座った状態で沐浴が実施される。この姿勢は、病院内で行われる立位で行う沐浴槽を使用した沐浴に比べ、腰や腕に負担がかかり、褥婦にとって、身体的な負担が大きい育児の一つとなる。そのため、実際に、対象者が自宅に戻ってどのような環境や姿勢で育児を行うのか体験することで、単に技術だけを習得するのではなく、母親の身体的・精神的負担や労力について考えることができる。また、褥婦の退院後の生活を肌で感じることができ、それに伴い必要となる看護について考えることができると考えた。実際に、学生からは、「座ってするほうが楽だと思っていたが、ベビーバスでの沐浴がこんなに大変だと思わなかった」という声が演習中に度々聞かれた（資料3、4）。



資料3. 沐浴演習の様子①



資料4. 沐浴演習の様子②



ことから、妊婦体験ジャケットを着用し、妊婦の生活の大変さを「受け入れ」した学生が、処置や看護を受ける際の身体的負担をできるだけ最小限にしようと腹囲・子宮底測定を行うという「反応」という行動へつなげる段階へ移行することができる演習となったと考えられる。同様に、分娩台上での分娩体位の体験も、羞恥心への配慮の必要性やプライバシーの配慮の重要性について理解し、必要となる配慮や支援について考えることができたと考えられる。

また、沐浴演習では、褥婦の立場に立って自ら体感することが重要であり、実際に、対象者が自宅に戻り、どのような環境や姿勢で育児を行うのか体験することで、単に看護技術を習得するだけでなく、対象者の身体的・精神的負担や労力について考えることが出来る看護を身につけてもらうことが出来る考える。学生はこれらの経験から、看護職として必要となる配慮や援助のあり方について考えることができたと考える。講義の中で沐浴手順や配慮する点を説明した内容を知識として理解するだけでなく、その環境におかれる対象者の立場を自ら体験し考えることを経験することは、今後の看護援助を行う際の、専門職として必要とされる能力を伸ばすことにつながると考える。母性看護学実習では、学生全員が対象を分娩時から受け持つとは限らず、また、分娩後数日経過してから受け持つこともある。妊娠期・分娩期のことを話題にする際、学生がイメージをしやすく、対象者の置かれている状況を把握する際に有効であると考えられる。

演習中は一方的な指導ではなく、看護技術を体験した学生が、感じたことを学生間で話し、共有できるようにした。その中で情意領域では、学生が自分の経験や体験を通して内面化を充実できるような構成とした。妊産褥婦の心情・心理については、昨今、少子化・核家族化が進み、本学の学生においても、妊娠中および出産の体験談を聞く機会や新生児と接する機会も少ない状況である。そのため、妊産褥婦の心情や心理、家族の役割の変化に伴う精神的支援について理解することは難しいことが予測される。このような状況の中で、本学の母性看護学において、演習項目に追体験となる経験を行ったり、実際に学生間で声かけをしながら情意領域に重点を置いた演習を構成することは、経験不足の状況にある学生が学外実習へ円

## V. 考 察

### 1. 情意領域から見た母性看護学演習

B.S.Bloomの教育目標の分類学の中の情意領域は、「受け入れ」、「反応」、「価値づけ」、「組織化」、「個性化」に分類される<sup>1)</sup>。その中で、「受け入れ」は、ある特定の現象や刺激の存在に対して学習者が感受性を持つこと、すなわちそれを受け入れようとしたり注意を払ったりすることに関係している。看護の内容では、看護の場におけるさまざまな現象を感じとり、それを看護の内容に変えていくための最初の気づきである<sup>2)</sup>。

妊婦体験ジャケットの演習の場合、妊婦の擬似体験を通して妊娠期の女性の生活を考えることができることを目的としており、ジャケット着用による体重増加により、学生は体の重さの変化を実感し、動作時の身体への負担を感じていた。この

滑に移行するために、重要な演習の要素となると考えられる。

## 2. 母性看護学における専門職に求められる能力と教育

本演習を通して、学生が迫体験を経験することは、単に知識や技術の向上だけでなく、周産期における母子に寄り添う姿勢を身につけるきっかけとなると考える。母性看護学における専門職の活動の場は、病院だけでなく退院後の自宅に戻った女性も対象になる。特に、昨今注目されている育児支援と関連する周産期メンタルヘルスでは、妊娠、出産、育児という一連の出来事の中で心理的支援が必要な場合は多い<sup>3)</sup>。心理的支援のためには、特に支援のあり方を知識として修得するだけで無く、情意領域に重点をおいた目標を置いて教育を行うことが重要である。

## 3. 母性看護学における情意領域の目標達成に有効な教授方法と今後の課題

看護教育学の専門書では、教員側から教育内容をどのように提供するかということは、学生側からみればそれをどのように自分のものにしていくかを意味する<sup>4)</sup>とある。情意領域に着目した教授方法は、本演習のように学生が自ら体験することによって、学習効果が高められたと考えられる。しかし、認知領域や精神運動領域と異なり、情意領域の教育は、感性を重要視し、価値観や人生観という個人色のつよいものと関連するため、一教科だけの教育でとどまるものではない。また、情意領域の評価における側面として、学生が看護実践と矛盾なく共存する価値体系に従って主体的に行動しているかどうかは、学生の行動を一定期間観察しなければ判定できない<sup>5)</sup>点がある。情意領域に着目した母性看護学の教授法の検討についての研究は少なく、今後、演習内容に関して情意領域の内容をさらに構築・検討するには、学生への聞き取りを行うなど、評価方法を検討していく必要がある。

## VI. おわりに

今回、母性看護学の学内演習をB.S.Bloomの教育目標の中の情意領域を中心に検討した。結果、あらためて、母性看護学領域における教授活動で

は、情意領域が重要であることが示唆された。今後は、情意領域における教育目標をさらに深め、より効果的な演習・実習内容のあり方を検討していく。

## 【文 献】

- 1) B.S.Bloom, George F. Madaus, J.Thomas Hastings : Handbook on Formative and Summative Evaluation of Student Learning, 1973.  
梶田叡一他 訳, 教育評価法ハンドブック, 433-441, 第一法規出版, 1973.
- 2) 田島桂子: 看護学教育評価の基礎と実際第2版, 医学書院, 58, 2009
- 3) 北村俊則: 周産期メンタルヘルスケアの理論, 医学書院, 213, 2007
- 4) 杉森みど里, 舟島なをみ: 看護教育学第4版, 医学書院, 133, 2004
- 5) Marilyn H.Oermann, Kathleen B. Gaberson : Evaluation and Testing in Nursing Education, 1998,  
看護学教育における講義・演習・実習の評価, 舟島なをみ 監訳, 医学書院, 18, 2001.
- 6) 小川久貴子, 大森智美, 李節子: 母性看護学における学内演習の検討 教授・学習目標における情意領域を考える, 東京女子医科大学看護短期大学研究紀要, 17, 73-80, 1995